

明治神宮内苑造営時における土地造成プロセスに関する研究

Study on the Land Development Process Related to the Meiji Shrine Inner Precinct Construction

○加藤凱久¹, 押田佳子²*Yoshihisa Kato¹, Keiko Oshida²

Abstract: In this study, we focused on the foundation environment of Meiji Shrine and investigated the land development process. As a result, it is clarified that the waterway structure of the Meiji Shrine was planned to give the role of the water source cultivation area, and then, the adjustment pond in the Yoyogi district.

1. 背景及び目的—明治神宮内苑は 1920(大正 9)年に造営され、2020(新暦 2)年で 100 周年を迎える「人工の杜」である。これまで明治神宮内苑は杜の壮大さや、都市における生態系、ヒートアイランド現象の緩和などに貢献していることから、「神宮の杜」として高く評価、議論されてきた。一方で、明治神宮内苑には北池、東池、南池など 3 つの池や水路網ならびに谷戸などの複雑な微地形を擁していることや、隣接する代々木公園や河骨川との接続など土地としての在り方についてはこの 100 年間にほとんど議論されていない^[1]。現在、神宮の杜は次の 100 年に向けての保全管理計画を考える段階にきているが、基盤環境にも言及する必要があるといえる。

そこで、本研究では、神宮の杜を支える基盤環境に着目し、土地造成プロセスを明らかにすることを目的とする。

2. 明治神宮内苑の概要—明治神宮内苑が造営された代々木地区は、江戸時代に井伊家などの大名屋敷であったが明治維新に際し政府に押収され、その後、南豊島御料地や代々木練兵場、農地として活用された。1912(明治 45)年の明治天皇崩御に伴い、京都の天皇陵とは別に東京の人々のための拝殿を必要視する声が高まり、1914(大正 3)年代々木練兵場と隣接する南豊島御料地に明治神宮内苑造営が宮内庁により決定した。明治神宮造営計画は、当時東京大学の学生であった本多静六や佐野利器らにより進められ、1915(大正 4)年に着工、1920(大正 9)年に鎮座された。境内面積は 72.2ha となる大規模な杜が造成された^{[2][3]}。

3. 調査方法—本研究の調査方法を Table1 に示す。

Table1 Outline of the survey(調査概要) (This is original table by authors)

	現地調査	地図資料調査	文献調査
調査日	2018 年 7 月 19 日	2018 年 8 月 20 日 ~9 月 3 日	2018 年 8 月 20 日
調査内容	現状確認	明治神宮造営前後の 地形変化及び土地活用	明治神宮内苑の土木工 事に関する文献
調査対象	明治神宮内苑	Table3 に示す地形図の オーバーレイ分析	明治神宮叢書第一三巻 造営編(2)

4. 結果及び考察—文献調査より、明治神宮内苑造営に係る土地造成プロセスは、4 時期に分類できた。Table2 に造成期の分類概要を示す。また、明治神宮内苑緑地計画によると 7 区画に分けて整備された。Figure1 に地形図のオーバーレイ分析結果と 7 区画の概要を示す。以下、各期の結果について述べる^[4]。

4-1. 南豊島御料地期—1909(明治 42)年、隣接する代々木練兵場から、第七区に存在した旧御苑の南池に土砂が流入した。そこで、代々木練兵場内に、土砂流入防止のための調整池の設置及び南池に流入した土砂の浚渫が行われた^[2]。

4-2. 明治神宮造営期—1915(大正 4)年の明治神宮造営に伴い、広範囲で地形造成がなされた。明治神宮内苑の地形は北西から南東へいくつかの谷戸を挟みながら標高が下がっており、元々第一区は水の集積しやすい湿地であったが、第三区の切土を第一区に盛土の形で転用、かつ貯水槽を設けることで対処した。この他の水処理対策として北池と東池の浚渫及び拡大があり、本殿への出水を防ぐための調整に加え、10 万本を超える森林構成樹木の灌水用であると考えられる。同様の考えは敷地全体に配された水路網にも見られ、参道付近の雨水を境内各所に集める事や、清正井の為の雨水の貯水などにより、参道が雨水で冠水しないような工夫されていたと考えられる。この他に、神宮の杜を壮大に見せるための修景的な演出として本殿裏に築山が造成された。第七区では、南池は旧御苑の修景地である為ほとんど改変されなかったが、前期に引き続き代々木練兵場との境界部には粉塵が飛来したため、

Table2 Production periods(造成期の概要) (This is original table by authors)

時期	南豊島御料地期	明治神宮造営期	旧東京オリンピック期	代々木公園開園期
土地改変施工年	1909 (明治 42)年	1915 (大正 4)年	1964 (昭和 39)年	1971 (昭和 46)年
土地改変計画概要	第七区南池の水質汚濁改善	明治神宮造営	首都高速道路開通、都内複数河川暗渠	旧代々木練兵場跡地に代々木公園の開園
地形変更された区画	第七区、代々木練兵場	第一区、第二区、第三区、第四区	第三区河骨川	第三区河骨川

1 : 日大理工・学部・まち、2 : 日大理工・教員・まち

これを防ぐための土塁造成がされた。また、明治神宮造営に合わせ旧品川鉄道の原宿駅が移転された。

4-3. 1964 東京オリンピック期—1964(昭和 39)年東京オリンピックに向けた区画整理事業により、神宮内苑の下水の排水先である河骨川が暗渠化された。加えて首都高速道路 4 号線が第三区北側に架かったため、宝物殿北側の地盤が均された。また、明治神宮に隣接していた代々木練兵場は 1946(昭和 21)年に米軍により接収されワシントンハイツとなり。その後、東京オリンピックを機に選手村として利用された^[3]。

4-4. 代々木公園開園期—1971(昭和 46)年選手村の再活用都市公園として代々木公園が開園した。練兵

場時代からの調整池は特徴を生かし、バードサンクチュアリとして利用されている^[3]。

5. まとめ—以上より、元々地下水位が高い代々木に造営された明治神宮内苑において、水による問題は造営当初より検討されており、建築物や参道を守る治水の役割と、樹木が持つ貯水機能を考慮しながらも灌水させるため緻密な水路網が張り巡らされたことが明らかとなった。以上より、明治神宮内苑そのものが代々木地区の調整池を担ってきたといえよう。

6. 参考文献

[1] 田中正太,「東京の公園と原地形」,けやき出版,pp.183-212,2005[2] 内山正雄,荻茂寿太郎,「代々木の森」,東京公園文庫,pp.1-61,1981[3] 相川真晴,布施六郎「代々木公園」,東京公園文庫,pp.1-121,1981[4] 明治神宮,「明治神宮叢書第 13 巻造営編」,明治神宮社務所,pp.447-626,2004

Table3 Outline of the construction area and overlay result (調査区画概要とオーバーレイ結果) (This is original table by authors)

